

日本における牡丹と獅子文化の形成と謡曲『石橋』

雨 宮 久 美

Kumi AMEMIYA. The Formation of a “Peony” and “Lion” Culture in Japan and Noh play “Shakkyou”. *Studies in International Relations* Vol.36, No.1. October 2015. pp.67 – 78.

The Noh play “Shakkyou” was an opportunity to show the combination of the lion (king of the beasts) and the tree peony (the king of flowers) through an acrobatic performance. After this, and even today, this magnificent combination has been played in the form of a musical variation in every aspect of Japanese cultural entertainment.

The lion dances with the beast messenger of Mañjuśrī, so it would be a natural combination with the “sacred lotus” that is an attribute of Mañjuśrī, and not the “peony” in flower arrangements. However, in “Shakkyou” and all original Noh chants, the “peony” is specified as being on stage.

The purpose of this article is to examine the various materials related to the “peony” up until the creation of “Shakkyou” from the perspective of the peony’s cultural reception in Japan.

Why was the “Lion” and “Peony” combination adopted for “Shakkyou”? We will seek the reasons by examining the peony’s Japanese heritage and its diffusion into Japanese society.

The significance of the peony changed from being used for medicine to having a deeper cultural significance during the Heian period; Bai Juyi contributed significantly to this change in the peony’s reception. The Mañjuśrī faith from Mount Wutain in China was also introduced to Japan during this time period, which had a large impact on Japanese society. Since both the “lion” (the Mañjuśrī beast messenger) and the “peony” were the kings of all kinds of beasts and flowers, respectively, they were both connected. Thus, it was through Buddhism that the peony’s motif was shifted to “peony and the Mañjuśrī,” in other words, “the lion and the peony.” Therefore, it was concluded that “Shakkyou” was created during the Muromachi period due to unifying this cultural reception with the tradition of the lion dance that has continued in an unbroken line since ancient times.

はじめに

謡曲『石橋』は、紅白の牡丹を配置した所作台にて獅子に扮装した後ジテが、舞狂う場面を見せ場とする。

獅子団乱旋の、舞楽の砌、獅子団乱旋の、舞楽の砌、牡丹の花房、匂ひ満ち満ち、大筋力の、獅子頭、打てや囃せや、牡丹芳、牡丹芳、黄金の薬、あらはれて、花にたはぶれ、枝に伏し転び、げにも上なき、獅子王の勢ひ、摩かぬ草木も、なき時なれや、千秋万歳と、舞ひ納めて、千秋万歳と、舞ひ納めて、獅子の座にこそ、直りけれ¹

獅子は文殊菩薩の使獣として舞うのであるから、花を配するなら「牡丹」ではなく文殊菩薩のアトリビュートである「蓮」と組み合わせることが最も自然であろう。しかし『石橋』では、いずれの流派においても、能道具の一畳台に「牡丹」を立てることを決まり事としている。

詞章中にも「牡丹の花房、匂ひ満ち満ち」等とあり、明確に獅子と牡丹とが関連づけられている。この組み合わせを言う「獅子と牡丹」または「唐獅子牡丹」は、現在慣用句ともなっている。このような取り合わせになった理由を考えるならば、「獅子」は〈百獣の王〉であり、富貴の象徴の「牡丹」は〈百華の王〉とされているからである。

無敵の獅子にも天敵がいる。それは獅子自身の身体に寄生する虫である。この虫を退治できるのは、牡丹の花に溜まる夜露（朝露）であり、それ

故に獅子は、牡丹の下で眠るとされる。これが「獅子と牡丹」の関係である。この両者の関連づけの一端は、仏典に由来する。ところが事情はそれほど単純ではない。仏教經典に典拠が求められるのは、いわゆる「師子（獅子ニ同ジ）身中の虫」のみである。『梵網經』や『仁王經』などがその典拠である（後述）。しかし、そこに「牡丹」は登場しない。

江戸研究に大きな功績を残した西山松之助の著作に『花一美への行動と日本文化』がある。西山は、文化史的な視点から、桜、牡丹、朝顔、蓮、菊、虞美人草、梅を取り上げ、これらの花と日本人との関わりを考察している。西山は、牡丹が日本の文化に受容された機縁として謡曲『石橋』を挙げ、次のように指摘している。

中国に比べると、日本の牡丹文化は比較のしようがないほど貧弱である。牡丹の花を論じた日本の本はまだ見たことがない。ひょっとすると一冊もないのではなかろうか。今でも椿や蘭はブームを呼んでいるが、牡丹に数万金を投じて世人がこれに狂じたということをきかない。しかし牡丹の文化がないわけではない。絵や彫刻のほかでは、まず能の「石橋」をあげねばなるまい²。

西山は、後世の芸能に与えた『石橋』の影響の大きさにも言及している。『石橋』における獅子と牡丹の取り合わせは、どのような背景をもっているのだろうか。この疑問を念頭に、日本における牡丹の文化的受容について、謡曲『石橋』成立以前の「牡丹」に関する諸資料を検討することを本稿の目的とする。

第一節 牡丹の伝來說

中村裕一『中国古代の年中行事』は、「唐代末期からすでに花王と評価されている」³と指摘している。『和歌植物表現辞典』「ふかみぐさ 深見草」の項には、以下のように記されている。

ボタン ボタン科。落葉低木で、高さは1～1.5メートル。枝は太く、葉も4～10センチ。色は白、紫、紅、黄など多彩。中国原産で、古代から地上部を薪に、根を薬用にしたと伝えられる。観賞は東晋（317～420年）の頃に始まったとされ、唐代には広く栽培され人々の間でもてはやされた。日本への渡来は平安時代初めの空海の入唐のおりとする説がある。以降栽植され、江戸時代には多くの園芸品種が作り出された⁴。

中国では、清代に「牡丹」を国花として制定していたが、1929年中華民国政府は、文人の高潔に喩えられる「梅」を国花と定めた。富貴の象徴「牡丹」は、国家の品格に相応しくないとの理由からである。

牡丹は、中国原産で学名は、「*Paeonia suffruticosa andrews*」⁵である。「*Paeonia*」はギリシア神話の神アポロンの別名であり、医術を司る意味を含み持っている。実際に古来牡丹は、薬草として用いられていた。

中国ならびに日本において牡丹の古い別称は多数ある。「木芍薬・洛陽花・穀雨花・富貴草・百華王・花王・花神・百両金・花中の王・天香国色・深見草・二十日草・忘れ草・鎧草・ぼうたん・ぼうたんぐさ・やまたちばな・てりさきぐさ・なとりぐさ」などが挙げられる。

例えば、「木芍薬」とあるのは、芍薬が草本性の植物であるのに対し、牡丹が木本性に分類されているからである。「洛陽花」の異名は、河南省洛陽市が古来より牡丹の名花の地であることによる。玄宗皇帝が洛陽から長安に牡丹を取り寄せたことも有名である。

中国では梅と人気を二分する牡丹は、花の豪華さから「百華王・花王」と称され、「富貴」の象徴とされてきた。牡丹の開花期間は、約二十日前後と比較的に短く、白居易が「花開花落二十日」と詠んだことから、日本では「二十日草」とも名づけられた。「名取草」「鎧草」などは日本での異名である。

中村の前掲書によれば「日本の古名は布加美久佐^{ふかみくさ}といい、平安時代に渡来したもので平安以前の

日本にはなかった⁶とある。この記述は「牡丹」の用例が、奈良時代の文献にあるのでさらに検討を要する。牡丹が「中国から日本に伝えられたのは、奈良時代（聖武天皇の治世）のころ」⁷とする説もある。天平五年（733年）の成立とされる『出雲国風土記』「意宇郡」の条に、「凡そ諸の山野に在らゆる草木」の一つとして、「牡丹」が見える。この「牡丹」⁸という漢字表記は、通例の解釈では、深根輔仁撰『本草和名』の「牡丹（略）和名布加美久佐、一名也末多知波奈」の釈例に従って「ふかみくさ」という和名で訓んでいる。一名として挙げられている「ヤマタチバナ」は庭木として一般的な藪柑子の異名である。

一名が「ヤマタチバナ」なので、ここでの「牡丹」は後世の観賞用のものとは違う。『出雲国風土記』の記述からも、「ふかみくさ」は、出雲の国の山野にふつうに自生していた植物と見るのが自然である。一方、源順撰『和名類聚抄』（平安中期）「草木部」には、他の草花とともに「牡丹」が載せられていて、こちらは観賞用の牡丹に当てることができる。しかし、この「牡丹」について、狩谷掖斎撰『箋注和名類聚抄』巻十は、以下のように注している。

雖下知_三末多知波奈是百両金非_二賞_レ花
牡丹_一刪上_レ之、然未_レ知_三布加美久佐
亦為_二所_レ謂_二呉牡丹_一、而不_レ削、皆誤⁹。

狩谷掖斎の指摘は、本草に謂う「百両金」「呉牡丹」と同じ植物である「ふかみくさ」を源順が誤り、花の列に入れているとしているというのである。「百両金」「呉牡丹」は、「藪柑子」のことである。平安時代の中期以降、中国渡来の牡丹が定着するまでは、「牡丹」の表記であっても日本自生の藪柑子を指していたのである。『風土記』の「牡丹」は花を鑑賞する今の牡丹とは全く別の植物ということになる。

第二節 生薬から観賞用へ

通説では牡丹は薬草として渡来したと考えられている。松田修は、「漢方ではこの根を利用し、牡

丹皮は頭痛、腰痛などに鎮痙薬とし、また婦人諸病に賞用する」¹⁰と述べている。延喜五（905）年勅令により編纂された『延喜式』巻三十七「典薬寮」には、「中宮藤月御薬…牡丹二両」¹¹、「伊勢国五十種…橘皮五斤。牡丹七斤十両」¹²、「備前国四十種…大戟牡丹天門冬桑蟬蛸各一斤」¹³と記されている。「典薬寮」とは、宮廷の医療機関である。薬草として平安時代に牡丹が栽培されていたことが分かるが、これが観賞用の牡丹と同種なのかは慎重な検討が必要になってくる。

日本人が牡丹の花を観賞用に栽培したことが確証できるのは、平安時代中期以降になってからである。清少納言『枕草子』（1000年以降）「殿などおはしまさで後」の段に、「台の前に植ゑられたりける牡丹などのをかしきこと」¹⁴の用例がある。「牡丹」は、「ぼうた」と字音で読まれている。

「たいのまへ」は、「対の前」と考え、対の屋の前にする解釈が多いが、萩谷朴は「「たい」は、牡丹が中国人の最も愛した花であり、第九十四段にも見えたシナ趣味の明順宅であるから、露台と牡丹との配合で、「台」と解する」¹⁵と注を付す。

この場面は、実家が没落して謹慎状態にある藤原定子の近況を、源経房が里下がりをしている清少納言に語るところである。萩谷の注では、末枯れた牡丹に中宮定子の心情が託されているという。それは『白氏文集』巻九「秋題牡丹叢」（0415）と題する「晚叢白露夕、衰葉涼風朝。紅艷久已歇、碧芳今亦銷。幽人坐相對、心事共蕭条。」¹⁶という詩を踏まえたものだとする。この詩は、中宮の悲しみ沈む心情に託して枯れ衰えた牡丹の花の寂しさを詠んだものである。花の観賞がただ目を楽しませるものであるばかりでなく、人々それぞれの心情表現を託すものにもなっていたのである。隋唐の時代になると、中国式の生花である挿花が芸術的にも格段に発展していく¹⁷。唐代に高まった牡丹愛好と、花々の新しい鑑賞様式は、唐代文化の強い影響を受けた平安時代の日本に間違いなく伝わっていたに違いない。

『栄花物語』「たまのうてな」には、「高欄高くしてその下に薔薇、牡丹、唐瞿麦、紅蓮花の花を植ゑさせ給へり」¹⁸という用例がある。藤原道長の阿弥陀堂の描写である。堂の前の池に面して高欄が

ありその下に薔薇、牡丹、唐撫子（石竹）、蓮花が植えられていて、「極楽に参りたらん心地」がしたという。牡丹が観賞用の花として貴族達の間で珍重されていたことが分かる。

以上、貴族社会での牡丹受容の例を挙げた、今日謂う所の「牡丹」の用例を確証できる十世紀初頭の文献がある。菅原道真の詩「法花寺白牡丹」と題する作である。後節で詳述するが、「色即為貞白 名猶喚牡丹」¹⁹と、清浄な白牡丹を仏の教えの象徴として詠んだものである。寺の荘厳として、当時珍しかった牡丹が栽培されていたのであろう。後述するように、白牡丹への関心は、白居易の詩とも深く関わっている。いずれにしても、この段階では、牡丹は純粹に美的鑑賞の対象とまではいまだなっていない。なかったのだらう。

牡丹鑑賞との関わりでいえば、挿花との関連も指摘される華道の文化にも言及しなければならない。

室町時代に成立した初期のいけばな伝書である『仙伝抄』「十二月の花の事。した草いづれもこゝろへ有」には、四月の花として、「四月ばたん青草三つ。一つは葉おほく。二つは葉少」²⁰が挙げられていて、牡丹とそれに配する下草のことが記されている。さらに同書「繪をうけてたつる花の事」には、各種の花と取り合わされるものが記されていて、牡丹についても興味深い記述がある。

くわんおんにやなぎ 天神にさくら（異本に梅と有）

とらに竹 りやうにまつ

古人にふりたる木 唐人にまたのある木

から子に色ある物 歌人に風情ある物

獅子にあれたるばたん 馬ぎきやうに草

山水に山野の木水邊草花（異本水邊の草花）

鳥にゑにしある物を。心にかけて立べきなり²¹

「獅子にあれたるばたん」を「あれたる獅子にばたん」と解することができれば、能『石橋』の終曲で牡丹の枝に伏し転び戯れる獅子の力強い舞を彷彿させる。

『池坊専應口傳』「専祝言に用べき事」の中にも「牡丹」の名が見える。

松、竹、梅、椿、柳、海棠、石竹、鶏頭花、岩躑躅、葱花、桔梗、菊、桃、石榴、仙翁花、岸比、節黒、牡丹、金錢花、山橘、白槿、芙蓉、長春、水仙花、仙蓼菓、百合、菁莪、杜若、常磐木、此等用べき也²²

『立華指南』にも、牡丹を高貴な花だとし、貴人・高官を請待する特別の時にだけ「牡丹」を用いたとの記述がある。

「三四月 牡丹通用草」 中やく 異名ふかみ草廿日草鑑草

花の王名取草鼠姑草姚黄花

さまざま異名あり色亦品々有尤花の高位なる物ゆへ古來無左と立花に不_レ用貴人高官を請待の時たつる物とぞ但去年の莖を切そへて根をよく焦せば水につよし今年生の青き莖ばかりにては間なくしぼむなり²³

牡丹が高貴な花であったことは、『立花秘傳抄之二』「花之部」にも記されている。

牡丹祝言上中

異名 木芍薬 百兩金 國色 醉西施

和名 ふかみ草 はつか草 てるほ草

名とり草

萬葉 名はかりは咲ても色もふかみ草花咲くならはなにゝしてまし

藏玉集 人の心なしとや名とり草花見るときはとかくすくなし

群花品の中に牡丹を以て第一とす故謂_二花王_一似_二其花似_一芍薬宿幹似_二木名_一木芍薬通用の證文也（中略）

牡丹は花王と云名を貴び。高位高官の御方にて宗匠の外門弟の指ことをゆるさず。古代は花大切なる故木を残して莖より切。筒に入。胴に用て請副に不遣。誠に立花の道理さもあるべきことなり²⁴

日本人がいつから牡丹の花を鑑賞するようになり、「をかし」と見るようになったか、その時期を正確に特定することは論者には出来ない。ただし、そこに中国文化の深い影響を認めることができる

とともに、室町時代になると、「生け花」の花材の一つになり、牡丹鑑賞が上流階級の間に広まって、中国とは違った牡丹文化が形成されていたことを資料から知ることができる。

第三節 唐詩の「牡丹」

中国で牡丹が鑑賞のために栽培されるようになるのは、隋代からである。中国における牡丹研究を集大成した『中国牡丹全书』に、「关于牡丹观赏栽培之有据可查的，是宋・余仁中《顾虎头列女传》中有画画描绘了院中栽培植的木芍药，顾虎头即晋大画家顾恺之，公元344～405年在世，可见牡丹的观赏栽培至今已有1600年左右。至于牡丹栽培品种的出現，則自隋始。」²⁵とあるとおりである。事物や名称の起源を記した宋の高承撰『事物紀原』には、「隋煬帝世。始傳牡丹。唐人亦曰木芍藥。開元時宮中及民間競尚之。今品極多也。一說武后冬月遊苑。花俱開。牡丹獨。遲遂貶於洛陽。故今言牡丹者。以西洛爲冠首。」²⁶とあり、隋代から人々が牡丹に関心を持ち始め、唐代に入ると長安や洛陽に牡丹の栽培技術が伝わって、ますます牡丹愛好が広まったことが分かる。唐代の牡丹流行を、白居易以前に牡丹を詠んだ王維、李白、柳渾の詩から確認する。

王維（701～761年）の「紅牡丹」と題する五言絶句は、愁いを帯びた紅の牡丹の風情を擬人化して詠んだものである。

緑艶閒且靜，	緑艶 閒にして且静なり
紅衣淺復深。	紅衣 浅にして復た深なり
花心愁欲斷，	花心 愁へて断えんと欲す
春色豈知心 ²⁷ 。	春色 豈心を知らんや

李白（701～762年）の「清平調詞三首」は、唐代の牡丹詩を代表する作である。詩体は、七言絶句。玄宗皇が楊貴妃を伴い興慶宮の沉香亭での遊宴の席で、李白に命じて詠ませたものである。「名花」の牡丹と「傾国」の美人楊貴妃とがともにその美しさを競いあっているさまを表現している。

其一

雲想衣裳花想容，	雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ
春風拂檻露華濃。	春風 檻を払つて露華濃やかなり
若非羣玉山頭見，	若し羣玉山頭に見るに非ずんば
會向瑤台月下逢。	会ず瑤台月下に向ひて逢はん

其二

一枝紅艷露凝香，	枝の紅艷 露香を凝らす
雲雨巫山枉斷腸。	雲雨巫山 枉しく断腸
借問漢宮誰得似，	借問す漢宮 誰か似るを得たる
可憐飛燕倚新粧。	可憐の飛燕 新粧に倚る

其三

名花傾國兩相歡，	名花傾国 兩つながら相歡ぶ
長得君王帶笑看。	長えに君王の笑ひを帯びて看るを得たり
解釋春風無限恨，	春風無限の恨みを解釈して
沈香亭北倚欄干 ²⁸ 。	沈香亭北 欄干に倚る

『全唐詩』に一首しか詩を残していない柳渾（716～789年）の「牡丹」と題する七言古詩は、牡丹が人気のあまり手が届かないほどの高値が付けられていたことを伝えており、当時の牡丹流行の貴重な証言となっている。

近來無奈牡丹何。	近來 牡丹奈何ともする無し
數十千錢買一顆。	数十千錢一顆を買ふ
今朝始得分明見。	今朝始めて分明に見るを得たり
也共戎葵不校多 ²⁹ 。	也た戎葵と共に校べざること多し

中唐の早い時期の李益（748～829？年）の「牡丹」と題する七絶も参考に挙げておく。

牡丹一作詠牡丹贈従兄正封
紫蕊叢開未到家，紫蕊叢り開くも未だ家に
到らず
紫教遊客賞繁華。却つて遊客をして
繁華を賞せしむ
始知年少求名處，始めて知る 年少
名を求むる處
滿眼空中別有花³⁰。滿眼 空中
別に花有るを

牡丹に心を奪われることなく自分の未来への志を持ち、功名心を忘れなかった青年の詩であるが、この詩からは一般の人がいかに熱中していたかも窺える。

以上『全唐詩』中の牡丹詩約200首中のわずかな例であるが、盛唐に入り詩人たちが牡丹へ関心を持ちはじめたことが推測できる。なかでも李白の作からは、華やかな牡丹を愛で観賞することが宮廷文化を背景に根づいていったことを知ることができる。

第四節 白楽天の「牡丹」

牡丹の花の鮮明な造形について、日本人に影響を与えたのは、白居易（772～846年）の作である。白居易が日本の文化・文学に多大な影響を与えたことは周知の通りである。菅原道真は白居易を敬慕し詩作の模範とした。平安貴族たちの間に好まれ、大江維時撰の七言佳句集『千載佳句』では、1083首中のほぼ半数を白居易の詩が占めている。『和漢朗詠集』では、中国の詩句230首余りの六割弱を占めている。その影響は、時代が下って謡曲『石橋』の詞章中にも見ることができる。

白居易の詩が印象的に引かれている『石橋』終曲の地謡の詞章は以下のとおりである。

獅子団乱旋の、舞樂の砌、獅子団乱旋の、
舞樂の砌、牡丹の花房、匂ひ満ち満ち、
大筋力の、獅子頭、打てや囃せや、

牡丹芳，牡丹芳，黄金の蕊，あらはれて，
花にたはぶれ，枝に伏し転び，げにも上なき，
獅子王の勢ひ，靡かぬ草木も，なき時なれや，
千秋万歳と，舞ひ納めて，千秋万歳と，
舞ひ納めて，獅子の座にこそ，直りけれ³¹。

「牡丹芳」が、白居易の「牡丹芳」（『白氏文集』巻第四）によることはいうまでもない。「石橋」の白詩引用箇所を訓読で示すと次のようになる。

牡丹芳 牡丹芳。牡丹芳 牡丹芳
黄金榮綻紅玉房。黄金の蕊^{はなぶさ}は綻ぶ
紅玉の房^{はなぶさ}
…中略…

花開花落二十日。花開き花落つること 二十日³²。

「牡丹芳」は、白居易の風諭詩の代表作である「新楽府」五十首中の一首である。風諭は、政治的諷刺を主題とする。以下に七言古詩「牡丹芳」の全文を挙げる。

「牡丹芳 美天子憂農也」
牡丹芳，牡丹芳，黄金蕊綻紅玉房。
千片赤英霞爛爛，百枝絳點燈煌煌。
照地初開錦繡段，當風不結蘭麝囊。
仙人琪樹白無色，王母桃花小不香。
宿露輕盈泛紫艷，朝陽照耀生紅光。
紅紫二色間深淺，向背萬態隨低昂。
映葉多情隱羞面，臥叢無力含醉妝。
低嬌笑容疑掩口，凝思怨人如斷腸。
穠姿貴彩信奇絕，雜卉亂花無比方。
石竹金錢何細碎，芙蓉芍藥苦尋常。
遂使王公與卿士，遊花冠蓋日相望。
庫車軟輿貴公主，香衫細馬豪家郎。
衛公宅靜閉東院，西明寺深開北廊。
戲蝶雙舞看人久，殘鶯一聲春日長。
共愁日照芳難駐，仍張帷幕垂陰涼。
花開花落二十日，一城之人皆若狂。
三代以還文勝質，人心重華不重實。
重華直至牡丹芳，其來有漸非今日。
元和天子憂農桑，卹下動天天降祥。

去歲嘉禾生九穗，田中寂寞無人至。
 今年瑞麥分兩歧，君心獨喜無人知。
 無人知，可歎息。
 我願暫求造化力，減卻牡丹妖艷色。
 少迴卿士愛花心，同似吾君憂稼穡³³。

詩題に「美天子憂農也」との白居易の自注が付されているように、牡丹の花の美しさに夢中になることなく、農事に勤しむ心を天子が忘れないでいることをほめた詩である。「牡丹芳 牡丹芳 黄金蕊綻紅玉房」の詩句が、謡曲『石橋』に採り入れられた部分である。謡曲作者の知識源になっていた『和漢朗詠集』などの選集類にこの「牡丹芳」は採られていなが、以下に述べる歌語「はつかぐさ」の由来になるほど知られた作品なので、『石橋』の無名作者は、なんらかの形でこの詩を知ったのであろう。

『詞花和歌集』春の部の「咲きしより散りはつるまでみしほどに花のもとにて二十日へにけり」³⁴という藤原忠通の牡丹を詠んだ歌は、「花開花落二十日」の句を踏まえたものだと、顯昭『詞花集注』は指摘している³⁵。この歌が、牡丹の異名「はつかぐさ」の由来となっている。院政期の漢詩作品にも「花開花落二十日」の詩句を引いたものがある。

「賦牡丹花」	藤原通憲
造物迎時尤足賞	牡丹栽得立沙場
衛公旧宅遠無至	白氏古篇読有香
千朵露薰幽砌下	一条霞聳廢籬傍
若非道士無竜腦	定是美人忘麝囊
唯惜飄飄風底色	不堪二十日間粧
饒匀未去褰簾客	耽艶遲帰擁箒郎
蘭尽微忠花裏傑	菊嫌尊号草中王
窓間曉訝呉綾彩	庭上夜疑齊燦光
庾嶺春梅還謝粉	洞庭秋葉更慙黄
豈如入夏斯叢錠	折翫終朝独断腸 ³⁶

牡丹の花の芳香は、道士が竜腦香を投じたものでなければ、美人が麝香の香袋を置き忘れたに違いないと詠んだものである。本間洋一『本朝無題詩全注釈一』は、「二十日間」の詩句に次のように

注を付けている。

「花開花落二十日。一城之人皆若狂」（白樂天「牡丹芳」）のように牡丹を楽しむのも晩春のこの二十日間程であることを言う³⁷。

牡丹の異名「はつかぐさ」の由来になるほど、白居易の「牡丹芳」中の「花開花落二十日，一城之人皆若狂」の詩句は日本で親しまれていたのである。牡丹の花が咲いている二十日間，あまりにも美しい牡丹の花に皆が見惚れてしまい，その熱中ぶりはまるで狂ったかのようにだと表現したものである。唐代の人々が現実を忘れるぐらい牡丹の花に没頭しきっていた様子を想像させる。

牡丹と白居易との深い関係³⁸も含め（「金錢買得牡丹栽，何處辭叢別主來？」と詠む「移牡丹栽」（1299）の作から，白居易が邸の庭に牡丹を栽培していたことが分かる），唐代における牡丹の流行については，陳寅恪『元白詩箋證稿』³⁹に筆記小説など関係資料が集められているが，ここでは簡潔にまとめられている石田幹之助『長安の春』を引く。

長安に於ける牡丹の花期は，三月の十五日を中心として前後二十日間のことであつた。「花開き花落つ二十日。一城の人皆狂ふが如し」と云はれ，「三条九陌花時の節，万馬千車牡丹を見る」と詠まれ，「花開く時節京城を動かす」と思はれ，（中略）柳渾をして，「近時牡丹を奈何ともするなし，數十千錢一窠を買ふ」と歎ぜしめ「種ゑて以て利を求め，一本にして値數万なるものあり」と記さるゝに至つたが，一時の風尚は容易に衰ふる様も見えなかつた⁴⁰。

『石橋』の作者は，牡丹への狂いと「獅子」の狂いを融合して，紅白の牡丹のもとで獅子に扮した後ジテが舞い狂う姿を創作した。

第五節 牡丹と仏教

平安時代中期の『菅家文草』巻四に、讃岐守時代（仁和二（886）年～六（890）年）に菅原道真が讃岐の国分尼寺法花寺に参詣して、境内に咲く白牡丹を詠んだ詩（「法花寺白牡丹」）がある。

色即為貞白。名猶喚牡丹。嫌随凡草種。
好向法華看。在地輕雲縮。非時小雪寒。
繞叢作何念。清淨写心肝⁴¹。

この詩では「白牡丹」を、浄土の「蓮華」にも比すべき清浄な花として詠んでいる。大系本の補注には、「文集、白牡丹詩にも「素華人不顧，亦占牡丹名」の句がある」と指摘されている。「白牡丹」（0848）の詩は、赤い牡丹ほどには世間から人気はないが、名前が同じ白牡丹を自分は好むと詠んだ詩である。菅原道真は白居易の「白牡丹」の詩に学ぶところがあったのだろう。道真は、菊の花もよく詠んでいる。中国では一般的である黄菊ばかりでなく、白菊も詠んでいる。貞潔や清浄の色として、菅原道真は、白を好んだようである。

仮名文学では『蜻蛉日記』中巻に「ぼうたんぐさ」として、道綱母が山寺に参籠した記事の中に牡丹が出てくる（天禄二年，六月）。

まづ僧坊におりゐて、見出だしたれば、前に籬ゆひわたして、また、なにとも知らぬ草どもしげき中に、牡丹草^{ぼうたんぐさ}ともいと情なげにて、花散りはてて立てるを見るにも、「花も一時」といふことを、かへしおぼえつつ、いと悲し⁴²。

この箇所は、散りはてた牡丹を見て、愛情の薄れやすいことを嘆いた一節で、道真の漢詩に見られるような宗教的な心情を述べたものではない。しかし、牡丹の植えられているのが寺の中だということは、先の道真詩と重なる。このとき道綱母が参籠した山寺は、右京区鳴滝にあった般若寺と推定されている。花の時期の過ぎた牡丹に愛情のはかなさを感じるとともに、「いと悲し」と諦観的に見ているのは、仏教的な無常観と美的な感性と

が綯い交せになっているからだろう。

また鑑賞用として牡丹が栽培されていたと考えることのできる資料として、前節で引いた『栄花物語』「たまのうてな」を挙げることができる⁴³。

『作庭記』の異本で、鎌倉時代初期に書写された『山水抄』には「牡丹ヤウノ物ヲ植ウベシ」⁴⁴と記されているように、庭で牡丹を栽培し、観賞する文化が平安時代に既に存在していたことが分かる。

平安時代以降、衣裳に好んで「牡丹文様」が用いられるようになった。例えば藤原信実筆とされる京都神護寺所蔵の、一説には源頼朝ともいわれる肖像の装束には、牡丹文様が描かれている。近衛家の家紋は車紋に由来していて、故実書『大要抄』の「車紋」に「近衛家の牡丹」があり、「一の人、上は白くして袖は牡丹」⁴⁵とある。一の人とは関白であり、近衛実家（1179～1242年）のことを指している。このような衣装紋や車紋は、今の家紋の基となっている。人物を牡丹に喩えるのは、『平家物語』「千手前」に見える。

「先年この人々を花にたとへ候しに、此三位中将をば牡丹の花にたとへて候しぞかし」と申されければ、「誠にゆうなる人にてありけり」とて、琵琶の撥音、朗詠のやう、後までも有難き事にぞ給ひける⁴⁶。

藤原親能（義）が平重衡は風流の人であったと回想する場面である。牡丹の花に喩えられる美しく華麗な人物として重衡は表現されている。平家の人物を花に喩えた「平家花揃」にも、「ぼたんのはなの、にほひおほく、さきみだれたる、あさほらけに、はつほととぎすの、ひとこゑ、おとづれたるほどとや、聞えむ」⁴⁷と、重衡は牡丹に喩えられている。

鎌倉時代の「牡丹と仏教」との関わりを見ることができる史料として、『明月記』寛喜元（1229）年四月十五日条の「折牡丹花供仏」の記事⁴⁸を挙げることもできる。仏前に牡丹の花を供えたという内容である。西山松之助は、五山文化が日本における牡丹受容に大きな影響を与えたと指摘しているが、牡丹が一般に鑑賞されるようになるのは、園芸文化が成立する江戸時代になってからである。

例えば、元禄時代に成立した伊藤伊兵衛『花壇地錦抄』には、「位、形、色、重、実、藁、葩、葉、木」⁴⁹の九品に分けての牡丹の鑑賞法が説かれている。

先にも見たように、『菅家文草』や、『蜻蛉日記』には牡丹が寺に植えられていた記述があるが、そこにはどのような宗教的な意味合いがあったのであろう。讃岐出身の観賢（斉衡元（854）年～延長三（925）年）が再興した鳴滝の般若寺は真言宗であり、讃岐国分尼寺法花寺も、近隣の讃岐国分寺が空海本人の再興ということもあり、道真が白牡丹を詩にした当時、既に真言宗に属していたと考えられる。密教と牡丹との関係は、歴史的にも浅からぬものがある。

第六節 獅子と牡丹

鎌倉初期建久七（1196）年の定慶作「木造維摩居士坐像」（国宝、興福寺東金堂所蔵）の台座には、「獅子」と「牡丹」の彫刻が施されている。藤岡穰「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」⁵⁰には、「台座腰部を獅子と牡丹の浮彫によって装飾するのも、宋工人陳和卿による新大仏寺阿弥陀如来像にみられるごとく、宋代図様になったものと考えられる」⁵¹と指摘されている。

新大仏寺の重要文化財阿弥陀如来像本尊の附属として指定されている石造基壇と、東大寺南大門に残る重要文化財「石の獅子」、これらの作品は、いずれも「当時新たに渡来した宋風によるもの」⁵²であることが確認されている。

室町時代の歌僧に、臨済宗の正徹の歌集『草根集』に「牡丹」と題して、「唐獅子」と「牡丹」を採り合わせた歌が詠まれている。

ともに見んことわりあれやもろこしの
獅子をえがけばぼうたんの花（二四一一）⁵³

ややいぶかりの気持ちを残しながらも、正徹は絵画における牡丹と獅子の取り合わせをそのまま受け入れている。各種の意匠をはじめ、生花での「牡丹と獅子」の取り合わせがあった。また正徹の歌からは絵画でも同様の組み合わせがあったこと

が分かる。中世の時代、牡丹には獅子を取り合わせるという理解が定着し、『石橋』もこれに合わせている。『石橋』の場合は、時代の流行を意欲的に取りこんだ舞台演出といってもいいのかもしれない。「獅子に牡丹」という取り合わせの流行に『石橋』の作者も従ったのか、それとも『石橋』そのものがその流行のきっかけとなったのか、それを判断をすることは、現在知られている資料から結論を出すことはできない。

仏教經典に見られる「獅子身中の虫」についてであるが、不空訳『佛説仁王般若波羅密經』八「唵累品下」や、鳩摩羅什訳『梵網經蘆舎那佛説菩薩心地戒品』第十下などに用例を見出すことができる。以下に、前者を引く。

大王我滅度後四部弟子。一切國王王子百官。
乃是任持護三寶者。而自破滅如師子身中虫。
自食師子肉非外道也。壞我法者得大過咎。
正法衰薄民無正行。諸惡漸增其壽日減。
無復孝子六親不和。天龍不祐惡鬼惡龍日來侵害。
災怪相繼為禍縱橫。當墮地獄傍生餓鬼。
若得為人貧窮下賤諸根不具。如影隨形如響應聲。
如人夜書火滅字存。毀法果報亦復⁵⁴。

はっきりとした典拠は不明だが、体内に寄生する獅子身中の虫の害を除くには、牡丹の夜露（朝露説もある）が効果的だと考えられるようになった。そこで、虎がその天敵象の牙が竹に弱いことから竹林に身を潜めるのと同じように（竹に虎）、獅子は牡丹の花の下で眠ることになった（獅子に牡丹）。竹林の虎のように、牡丹と獅子の取り合わせも、図様の恰好の題材となった。それが頻出するようになったのが、室町時代以降であり、武具・仏具にその最初の形態を認めることができる。

2011年にサントリー美術館で開催された『不滅のシンボル鳳凰と獅子』の特別展に範囲を限って、「獅子と牡丹」をデザインした室町以前の工芸品を挙げる。

鎌倉時代作の「牡丹と獅子羯磨獅子薪絵戒体箱」は、愛知の万徳寺所蔵で、「密教の法要の際に導師の脇に置き戒に関する文書等を入れるのに用いる」⁵⁵ために使われたものである。「牡丹と獅子」が仏教

とも結びついていることが窺われる。これが密教儀礼の道具の一つであることも見過ごせない。鎌倉時代作「獅子牡丹蝶鳥文様銅鏡」⁵⁶、南北朝時代作「獅子牡丹蒔絵絵箱」⁵⁷も「牡丹と獅子羯磨獅子蒔絵戒体箱」と同様の作品となる。

室町時代になると、「獅子と牡丹」の組み合わせが、武具にも用いられるようになった。「獅子と牡丹」という取り合わせが徐々に一般化していく過程で、甲冑武具の装飾に獐猛な「獅子」を用いるとともに、その唯一の弱点を補う牡丹を添えることは自然な発想である。「獅子牡丹図目貫無銘（祐乗）」⁵⁸は、互いを見つめ合う獅子二頭のうち一頭が牡丹を咥えている。また「獅子牡丹図目貫無銘（乗真）」⁵⁹も、一頭の獅子が牡丹を咥えている。この目貫は、「室町時代以降、歴代の権力者を支えてきたのが、刀装金具の制作者として名高い後藤家の人々である。彼らは、動物、植物、故事人物、風景など様々な意匠を刀装具の世界で洗練させ展開したが、とくに獅子は初代祐乗の代表意匠であった」⁶⁰。

室町時代に「獅子身中の虫」に「牡丹」の薬効が効果的であるという伝説が流布していたことが分かる。無敵の獅子に牡丹が加わることで不死身の強さが得られることから、武具におけるこの取り合わせは縁起担ぎの意味である。

おわりに

謡曲『石橋』に「獅子」と「牡丹」が取りあわされた要因を牡丹の伝来と文学から探った。薬用の牡丹から、より文化的な意味を帯びた牡丹へと、平安時代の「牡丹」受容の変化に大きく寄与をしたのは、白居易である。

白居易の時代には「花開き花落つ二十日。一城の人皆狂ふが如し」と詠まれるほど流行していたが、そもそも中国での牡丹の歴史は古い。仏教伝来以前から中国では、牡丹を生薬として珍重してきた。中国河南省の洛陽で、後漢時代（六八年）最古の仏教寺院白馬寺が創建されたが、この洛陽が「牡丹」栽培に適した土壌であったことから、「仏教」と「牡丹」とが繋がる素地が出来た。唐の時代、楊貴妃が「牡丹」を好み、また李白や白居

易の詩などを介してもてはやされた結果、牡丹は遣唐使らによって我が国にもたらされた。仏教との関連でいえば、洛陽に隠棲して仏教に帰依した白居易を媒介にしている可能性もある。空海の牡丹将来説を取れば、日本における仏教と牡丹との結びつきをうまく解くことができるが、文献の例に基づけば寺院での栽培が仏教と結びつけたとするのが自然である。「仏教」と「牡丹」との繋がりが、「文殊菩薩と牡丹」、つまり「獅子と牡丹」へと特殊化し、これが、奈良時代以来受け継がれてきた獅子舞の伝統と融合して、室町時代に創作された『石橋』が作られた。

謡曲『石橋』が、百獣の王である「獅子」と百花の王である「牡丹」との組み合わせを、アクロバティックなパフォーマンスで表現したことを機縁にして以降、この華麗なる組み合わせは、今日に至るまで、芸能の分野を中心に、日本文化の各方面で変奏曲を奏でることになった。

¹ 謡曲「石橋」（小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集②』（『日本古典文学全集59』）小学館、1998年2月、590～591頁

² 西山松之助『花—美への行動と日本文化』（NHKブックス328）日本放送出版協会、1978年10月、46頁

³ 中村裕一『中国古代の年中行事 第一巻春』汲古書院、2009年1月、75頁

⁴ 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』東京堂出版、1994年6月、289頁

⁵ 牧野富太郎『原色牧野植物大図鑑』北隆館、1997年3月、324頁

⁶ 中村裕一、前掲書、731～732頁

⁷ 江川一栄・芝沢成広・青木宣明編『ボタン・シャクヤクNHK趣味の園芸—よくわかる栽培十二か月』HNK出版、2004年4月などの園芸書が記す奈良朝渡来説は、寺島良安『和漢三才図会』あたりから始まると思われる（「本朝聖武帝時盛賞之」和漢三才圖會刊行委員会編『和漢三才圖會〔下〕』東京美術、1970年3月、1294頁）。

⁸ 植垣節也校注・訳『出雲風土記』（『日本古典文学全集5』）小学館、1997年10月、153頁

⁹ 京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成倭名類聚鈔〔本文篇〕』（増訂版）臨川書店、1968年7月、467頁

¹⁰ 松田修『古典植物辞典』講談社、2009年8月、246頁

¹¹ 『延喜式』卷三十七「典藥寮」（黒板勝美編『新訂増補国史大系26 交替式・弘仁式 延喜式』）吉川弘文館、1900年、762頁

¹² 『延喜式』前掲書、830頁

- ¹³ 『延喜式』前掲書, 987頁
- ¹⁴ 松尾聰・永井和子校注訳『枕草子』（『日本古典文学全集18』小学館, 1997年11月, 261頁
- ¹⁵ 萩谷朴校注『枕草子 上』（新潮古典集成）新潮社, 1977年4月, 323頁
- ¹⁶ 岡村繁『白氏文集 二下』（新釈漢文大系117）明治書院, 2007年7月, 480頁
- ¹⁷ 黄永川『中国插花史研究』西泠印社出版社, 2012年9月参照
- ¹⁸ 山中裕・秋山虔・池田尚隆校注訳『栄花物語②』（『日本古典文学全集32』小学館, 1997年1月, 306頁
- ¹⁹ 注41参照
- ²⁰ 華道沿革研究会編『仙傳抄』（花道古書集成第一巻）思文閣, 1930年11月, 13頁
- ²¹ 『仙傳抄』前掲書, 39～40頁
- ²² 『池坊専應口傳』（花道古書集成第一巻）, 前掲書, 9頁
- ²³ 『立華指南』（花道古書集成第一巻）, 前掲書, 58頁
- ²⁴ 『立花秘傳抄之二』（花道古書集成第二巻）思文閣, 1930年11月, 44～45頁
- ²⁵ 中国牡丹全书编纂委员会編『中国牡丹全书（上）』中国科学技术出版社, 2002年3月, 5頁
- ²⁶ 『事物紀原 實寶録 書叙指南』（四庫類書叢刊）上海古籍出版社, 1992年4月, 287頁
- ²⁷ 陳鐵民校注『王維集校注』中華書局, 1997年8月, 640頁
- ²⁸ 詹鐸『李白全集校注彙釋集評』百花文艺出版社, 1996年12月, 766・769・773頁
- ²⁹ 『全唐詩』卷一百九十六, 王全等點校『全唐詩』中華書局, 1960年4月, 2014頁
- ³⁰ 『全唐詩』卷二百八十三, 前掲書, 3225頁
- ³¹ 謡曲『石橋』（小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集②』（『日本古典文学全集59』小学館, 1998年2月, 590～591頁
- ³² 唐代の鈔本の流れを汲む金沢文庫本の訓点を参照した。川瀬一馬監修『金澤文庫本白氏文集（一）』勉誠社, 1983年10月, 54頁
- ³³ 謝思煒撰『白居易集校注』中華書局, 2006年7月, 379頁,
- ³⁴ 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注『金葉和歌集 詞花和歌集』（新日本古典文学大系9）岩波書店, 1989年9月, 233頁
- ³⁵ 久曾神昇編『日本歌学大系 別巻四』風間書房, 1980年4月, 460頁
- ³⁶ 本間洋一『本朝無題詩全注釈一』新典社, 1992年3月, 118頁
- ³⁷ 本間洋一『本朝無題詩全注釈一』新典社, 1992年3月, 120頁
- ³⁸ 白居易の牡丹を詠んだ詩には, 「牡丹芳」のほかに, 五言古詩「白牡丹」和錢學士作（0031）謝思煒『白居易詩集校注』中華書局, 2006年7月, 72頁, 五言古詩「鄧魴張徹落第（0044）」謝思煒, 前掲書101頁, 五言古詩「傷宅（0077）」謝思煒, 前掲書162頁, 五言古詩「買

- 花（0084）謝思煒, 前掲書181頁, 五言古詩「歎魯二首」（其二）（0120）謝思煒, 前掲書258頁, 五言古詩「西明寺牡丹花時憶元九」（0392）謝思煒, 前掲書721頁, 五言古詩「秋題牡丹叢」（0415）謝思煒, 前掲書741頁, 五言古詩「和元九悼往 感舊蚊幃作。」（0422）謝思煒, 前掲書751頁, 五言律詩「代書詩一百韻寄微之」（0608）謝思煒, 前掲書997頁, 七言律詩「看渾家牡丹花戲贈李二十」（0632）謝思煒, 前掲書1014頁, 七言律詩「自城東至以詩代書戲招李六拾遺崔二十六先輩」（0634）謝思煒, 前掲書1018頁, 七言絕句「醉中歸整屋」（0643）謝思煒, 前掲書1023頁, 七言絕句「見元九悼亡詩因以此寄」（0718）謝思煒, 前掲書1073頁, 七言律詩「重題西明寺牡丹時元九在江陵」（0721）謝思煒, 前掲書1075頁, 七言絕句「微之宅殘牡丹」（0734）謝思煒, 前掲書1084頁, 七言律詩「惜牡丹花二首 一首翰林院北廳花下作, 一首新昌寶給事宅南亭花下作。」（0743）謝思煒, 前掲書1092頁, 七言絕句「白牡丹」（0848）謝思煒, 前掲書1200頁, 「燕子樓三首 並序」（0859）謝思煒, 前掲書1208～1209頁, 七言絕句「畫木蓮花圖寄元郎中」（1127）謝思煒, 前掲書1447頁, 七言絕句「移牡丹栽」（1299）謝思煒, 前掲書1573頁があり, 唐詩中の牡丹詩のなかでも異彩を放つ。括弧内の数字は, 花房英樹『白氏文集の批判的研究』の定める作品番号。
- ³⁹ 陳寅恪『元白詩箋證稿』上海古籍出版社, 1978年3月, 235～240頁, なお路成文は, 「牡丹玩賞之风习, 在玄宗朝由宫廷波及市井“士庶之家”, 表明这种风俗正在广泛传播。恰恰在这个时候, 发生了李白沉香亭醉赋《清平调》这样一件极富传奇色彩的事情。这对于正在传播中牡丹玩赏风俗无疑起到了推波助澜的作用。从以上两点可知, 李白沉香亭醉赋《清平调》之事具有重要的民俗学意义。」（《咏物文学与时代精神之关系研究：以唐宋牡丹审美文化与文学为个案》暨南大学出版社, 2011年12月, 20頁）と指摘していて, 玄宗・楊貴妃の牡丹愛好と, 牡丹の美しさを賞美し, その牡丹にも勝る楊貴妃の美しさだと詠んだ, 先に引用した李白の「清平調」の波紋が, 牡丹流行に大きく拍車をかけたと論じている。
- ⁴⁰ 石田幹之助『長安の春』（東洋文庫91）平凡社, 1967年5月, 10頁
- ⁴¹ 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集』（日本古典文学大系本72）岩波書店, 1966年10月, 360頁
- ⁴² 菊地靖彦, 木村正中, 伊牟田経久校中・訳『土佐日記・蜻蛉日記』（『日本古典文学全集13』小学館, 1995年9月, 228頁
- ⁴³ 注18に同じ。
- ⁴⁴ 森蘊『「作庭記」の世界』日本放送出版協会, 1986年3月, 197頁
- ⁴⁵ 『大要抄』は, 『尊経閣善本影印集成第七輯 平安鎌倉儀式書』のシリーズの一冊として予定されているが未刊なので, 丹羽基一『家紋の由来と美』南雲堂, 1999年5月によった。
- ⁴⁶ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語 下』（新日本古典文学大系45）1993年10月, 224頁

- ⁴⁷ 横山重・松本隆信編『室町物語大成 第十二ふんーみし』角川書店、1983年2月、136頁
- ⁴⁸ 財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 明月記四』朝日新聞社、2000年8月、357頁
- ⁴⁹ 加藤要校注『花壇地錦抄 草花絵前集』（東洋文庫288）平凡社、1976年4月、5頁
- ⁵⁰ 「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」『学叢』（京都国立博物館）第二四号、2002年5月所収
- ⁵¹ 同上、19頁～20頁
- ⁵² 文化庁監修『文化財講座 日本の美術7彫刻（鎌倉）』第一法規出版、1977年2月、6月、161頁
- ⁵³ 「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第八卷 私家集編』角川書店、1990年4月、121頁
- ⁵⁴ 不空訳『佛説仁王般若波羅密經』『大正新脩大藏經第八卷般若部四』大正新脩大藏經刊行会、1924年8月、844頁
- ⁵⁵ 石田佳也、上野友愛、丹羽恵理子編『不滅のシンボル鳳凰と獅子』サントリー美術館、2011年6月、178頁
- ⁵⁶ 石田佳也他編、前掲書、178頁
- ⁵⁷ 同上
- ⁵⁸ 石田佳也他編、前掲書、184頁
- ⁵⁹ 同上
- ⁶⁰ 石田佳也他編、前掲書、185頁

参考文献

主な原典資料

- 王全等點校《全唐詩》，中華書局，1960年4月
- 謝思煒《白居易詩集校注》，中華書局，2006年7月
- 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集』（日本古典文学大系本72）岩波書店、1966年10月
- 石田佳也、上野友愛、丹羽恵理子編『不滅のシンボル鳳凰と獅子』サントリー美術館、2011年6月

主な研究書

- 王高潮、刘仲健《中国牡丹培育与鉴赏及文化渊源》，中国林业出版社，2000年1月。
- 中国牡丹全书编纂委员会編《中国牡丹全书（上）（下）》，中国科学技术出版社，2002年3月。
- 路成文《咏物文学与时代精神之关系研究：以唐宋牡丹审美文化与文学为个案》，暨南大学出版社，2011年12月。
- 西山松之助『花と日本文化 西山松之助第八卷』吉川弘文館、1985年6月